

花園大学 日本文学科 通信

第5号
通巻33号

二〇二二(平成二十四)年七月一日発行
編集・発行 花園大学日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京蛸ノ内町八一
TEL (075) 811-1511
振替 〇一〇五〇一四三九九五

東日本大震災から一年余を経て

後藤 健司

突如仙台で遭遇した千年に一度の大地震。立つこともできず、座り込むこともできず、四つん這いになって、地面から投げ飛ばされないように、はいつくばることがやつとの六分間。崩壊する家屋群。その後絶え間無く起こる余震。止む事なく鳴り続ける携帯電話の緊急地震警報。ライフラインが壊滅。情報が全て杜絶。大津波もわからない。福島原発事故もわからない。雪が降り、寒い。物流も杜絶。コンビニは開かない。食べ物が無い。ガソリン・灯油も無い。全くの闇夜。自然の威力の恐ろしさを思い知らされた。現代の生活の脆弱さを思い知らされた。

それから一年余。未だ余震が続く。大地震の恐怖から逃れられない。身がすくみ、仙台から離れることができない。文政十一年の三条地震の際、良寛さんの一文。「災難に逢時節には災難に逢がよよく候。死ぬ時節には死ぬがよよく候。是はこれ災難をのがるの妙法にて候。」とあるが、凡人には、やはり全く無理。

この間、人間の強さ・暖かさ、弱さ・冷たさを考えさせられた。自己の命を犠牲にしても他人の救助に走った方々。日本中、世界中から本当に多くの支援をいただいた。

反面、「きれいごと」だけではないのも世の常。放射線の健康影響をめぐる混乱、不信が続く。「絆・絆」と叫ばれるが、大津波に襲われた地域の未処理の瓦礫を引き受ける自治体の少なさ。詳細は知らないが、京都の五山の送り火では、被災地の松の受け入れを拒否された。風評被害で東北地方、特に福島の農産物が売れない。科学的根拠に乏しい、いわば《物の怪》の出現である。中古・中世の説話集にでてくる《物の怪》に恐れおののく人々の再現である。

さて、今後、日本中で巨大地震が起きると言われている。必ず巨大地震は起こると思う。経験上から敢えて述べれば、何時、何処で大地震に遭うかはその人の《運》次第だと思う。人間、自分自身のこれから先は全くわからない。だから、「中部経典」「一夜賢者経」にある「過ぎ去るを追うことなかれ。いまだ来たらざるを念うことなかれ。過去、それはすでに捨てられたり。未来、それはまだ到らざるなり。されば、ただ現在するところの

ものを、そのところにおいてよく観察すべし。揺らぐことなく、動ずることなく、それを見きわめ、そを實踐すべし。ただ今日まさに作すべきことを熱心になせ。」の、ごく一部だけでも実践できるような心掛けて生きたいと思っている。

(昭和48年度卒業生)

多くの経験が生かされていく

秋山 妙蓮

花園大学で学び、卒業後、中宮寺に勤めながら、子ども達に書道を教え、日本文学科共同研究室で助手の仕事をして頂き、十五年経ちました。

日本文学、書道を中心に学んだ学生時代を振り返りますと、とにかく一つでも多くの事を得て身につけていきたいと思い、新聞先生にアドバイスを頂きながら、国語、書道教諭免許、図書館司書を取得しました。親身になり力になって下さる先生方、書道部に在籍し、かけがえのない多くの友と出逢い、時間がいくらあっても足りない程、充実した生活を送る事が出来ました。

卒業後すぐ、助手をさせて頂く事になり、今度は助手の立場から、日本文学の研究を志す学生達の手助けをしながら、私の経験を伝えていけたら・・・と思いました。

何事も多くの経験をする事によって、それが大変な事であればある程、自分の為になっていきます。最初は何故、無関係な事をしなくてはいけないのかと、理不尽に思う事もあるはずですが、一見遠回りのようですが、多くの事に目を向ける力、

その様々な経験が、その後多くの場所で生かされている事に気付きます。もちろん継続している事は自信に繋がります。誇りを持って日々努力し、更なる向上を目指すことに繋がります。私にとつては三十二年間続いている「書」がその一つです。「書」とは何であるか、書に携われれば携わる程、書の深さを感じ、追い求めます。そして、自分一人ではなく、多くの人に支えられ生かされている事、感謝の気持ちを忘れず、これからも精進していきたいと思えます。

(平成8年度卒)

恩師の話

下川 新

私がお世話になった花園大学を卒業して、今年で十年目となる。大学院でご指導をいただいた丸山顕徳先生とはじめてお会いしたのが十二年前の話だから、ずいぶんと月日が経ったものだと思う。私の恩師である丸山先生は今年で定年を迎えられ、特任教授として花園大学で教鞭をとられるとお聞きしている。大学を卒業した後、研究旅行や卒論合宿に参加し、ご指導を受けている身としては、いつまでもお元気であっていただきたいと思う。

ところで、花園大学の学生さんに合宿等の機会では私の恩師の話聞かれ、起こったことをそのまま話しているのに、作り話ではないかと疑われることがある。どうも笑い話の類ではないかと思われる節がある。例えば、沖繩のとある離島に民間伝承のフィールドワークに訪れた際、道の真

ん中で真昼間から酒盛りをしている島のお年寄りに捕まり、客人に是非お酒を振舞わせてほしいと懇願され、お酒が弱いのに飲んでしまい千鳥足で宿までなんとかたどり着いた話。飛行機で沖繩に向かう途中、台風に遭遇するも、たまたま台風の目をすり抜けて無事ついた話。一緒に調査旅行にいった学生と美味しいからと一週間沖繩そばを食べ続けた話等である。卒論合宿等でお会いする学生の方々にはこのような恩師の一面はあまり知られておらず、卒業論文を時に厳しく、時に優しく指導する先生の姿しかご存知ないのは残念である。これは恩師に限った話ではなく、どの大学の先生にもいえるのかもしれない。大学は小中高と続けてきた、与えられる教材をこなす、いわゆる「勉強」をする場所ではなく、自分で疑問を見つけ、自分で解決する方法を探す「学問」をする場所だと思ふ。そのような思考や、方法を知るには、講義を真面目に受講することは勿論であるが、自分の先生の一見なんの役にも立たないような話を沢山聞くのが意外に近道であるように思う。一緒にお茶など飲みながら、学生の方は茶菓子でも持って先生の研究室に遊びに行つてほしい。少なくとも私の恩師は喜ぶはずである。

(平成13年度卒)

花園大学を卒業して

西川 陽 華

私は花園大学文学部書道コースで、四年間書について学んできました。大学では、書の制作を通

して、作品作りの難しさや技術の向上、書道史、書道概論について書についてさまざまな角度から学ぶことが出来ました。そして、中国蘇州大学に一年間交換留学させていただいたことは大変貴重な経験となりました。

大学に入るまで、私は書道というものは、主に作品制作そのものだと思ひ込んでいたところが、これまでの親しんできたお稽古の延長で、更に技術の鍛錬をして作品制作に励めばいいのだと思つていました。けれども大学に入って、書道を専攻したことで、制作するにも技術鍛錬だけではなくて、古典的な名品を学ぶことやそれぞれの時代背景を十分に理解すること、作品を制作する以前にその作品がどのようにして出来上がったのかを知る必要があることを学びました。そういう中で、書道の深さを感じながらも、もう少し書を学びたいと思ひ、卒業後は大阪教育大学教育学研究科芸術文化専攻書道専攻で研究することになりました。大学院では、私は書体の中でも、一番古い書体であり、文字の成り立ちや語源を考えさせられる篆書体に興味を持ち、篆書体での制作研究をしてきました。そして、今年三月に大学院を修了し、現在は大阪府の高等学校で非常勤講師をしています。教えることは、自分にとつても新たな発見や大きな驚きがありとても勉強になります。書道は芸術選択となり週に一度あるのが限界です。その中でどれだけのことを伝えられるのかは分からないですが、書に少しでも興味を持つ生徒が出てくれたらという思いで授業をしています。

今こうして、書の道を通して講師をしながら勉強させていただけなのは、花園大学の書道コース

の先生方はじめ学校に関わって下さった諸先生方、友達との出会いのお陰であると思ひ感謝しています。そしてこれからは、花園大学で学んだ多くのことを糧に、自分を更に磨き、人に感動を与える作品制作を目指し、より多くの人に書道の深い本当の魅力や良さを伝えていきたいと思っております。

(平成21年度卒)

「トルコ旅行記」

中井裕也

私は在学中にトルコに行きました。何故トルコなのかと言うと、トルコは親日国であり、カッパドキアや「トロイの木馬」で有名なトロイや、先住民であったキリスト教の民族が山地から来たトルコ民族によって侵略され攻められている時、避難所かつ隠れ家として使われていた地下都市カイマクルなどの世界遺産もたくさんあったからという理由でした。

トルコに行つて驚いたことは、現地の人々がカタコトながらも日本語が使えるといった所でした。トルコ人の方からとてもフレンドリーに話しかけてきます。他にはトイレ事情にびっくりしました。今日でこそ日本でも有料の公衆トイレの存在は知られているものの、あまり馴染みがあるものではないと思われまふ。しかし、あちらでは観光地やちょっとした田舎のトイレでは、使用料として1リラ(約40円ほど)程支払わないといけないかったのにはびっくりしました。

もうひとつ、トルコではトイレの紙を水に流せず横に備え付けてあるゴミ箱に捨てなくてはいけなかった事です。最初のうちは無意識にトイレに紙を流してしまう癖がついていて、中々大変でした。

慣れない事もありましたが、良い事も沢山ありました。中でも世界遺産はとても素晴らしかったです。トルコで一番好きだった場所はパムツカレの景色でした。パムツカレは温泉によって地中の炭酸カルシウムが噴出し、その炭酸カルシウムが沈殿して構成されたもので、普通に温泉が流れていました。そこから見る白い石灰華段丘と周りの自然がとても雄大で、日本では中々体験できるようなものではありませんでした。

在学中に、トルコに限らず一度は海外に旅行してみてもいいかと思ひます。現在では簡単に調べられる時代ですが、その情報だけで行つたつもりになるのではなく、自分で体験した事や思つたことを大切にすることが大事であると思ひます。その事が自分の価値観や今まで知らなかった世界への見識を広げ、自分自身のプラスになると思ひます。

(平成23年度卒)

この頃思うこと

下野健児

花園大学に奉職して十七年目をむかえることになった。三十代後半でできたばかりの書道コース担当となつてからがむしゃらに突つ走つて、気づいたら五十六才の自分がある。若い頃の体力はず

でなく、少し前までは気力だけで頑張つてきたが、この頃はその気力さえもへたりがちだ。先輩諸氏にご指摘いただくように専門分野での業績を積み重ねることもできず、日々の授業、学生対応、コース雑務、そして大学から与えられた校務をこなすことで毎日が過ぎていく。着実に業績を積み上げておられる先生方をいつも尊敬と羨望のまなざしで眺め、ため息をついている。

問題は、書道コースには専任教員として私しかないことだ。今まではこの状態でなんとかやってこれたが、定年まで一〇年をきつた今、私にできることは限られている。大学にお世話になつている以上、授業や学生対応には手をぬぎたくない。一方で研究者のはしくれとして、専門の分野においてもそれなりの仕事を成し遂げたい。日々あせりを感じつつ、刻々と時間だけが過ぎ去っていく。「まあいいか、明日やれば……」「明日からがんばろう……」と独り言を言いつつ。毎年、年の暮になると「来年こそは少なくとも論文二本は仕上げるぞ」と、新しい年に向けて自分に目標をあたえるのだが……。

あと一〇年、どのように生きるべきか。一年くらい、サバティカルをとつてまとまった論文を書きたいところだが、現状ではむずかしいだろう。今まで以上に時間をやりくりして、一步一步着実に進むしかない。あと。一〇年、体力、気力との戦いだ。

(本学教員)

◎教職員消息

・丸山頭徳教授は、本年三月で定年を迎えられ、引き続き特任教授として教鞭をとられることになりました。

・日本文学共同研究室の室員として、旧国文学科時代から十五年間お世話いただいた秋山妙蓮さんが、本年三月を以て退職されました。長い間ありがとうございました。

◎二〇二二年度「京都市夏期公開講座」(無料)

日時 八月一日(水)・二日(木)・三日(金)
午後一時より
会場 無聖館 五階ホール

※講演題目・講師等につきましては、ホームページ・ポスター・チラシ等でお知らせする予定です。詳細につきましては、花園大学企画広報室までお問い合わせ下さい。

◎花園大学日本文学会・公開講演会(無料)

日時 二〇二二年六月二十四日(日)

午後一時～四時

会場 自適館三〇〇番教室

講演 古代文学における罪と罰

——日中比較文化論——

丸山 頭徳 本学教授

太宰治の魅力

渡部 芳紀 中央大学名誉教授

※講演会の後、「懇親会」を開催します。ふるってご参加ください。先生方や後輩たちとの楽しい懇談の場になりたいと思います。

◎「花園大学日本文学論究」第四号

・「竹取物語」絵の配列と多義性

——逸翁美術館本と諏訪市博物館本の比較を通して——

曾根 誠一

・千手の誓ひぞたのもしき

——お伽草子と清水寺観音——

新聞 水緒

・谷崎潤一郎論「初期作における女性像の変遷

福田 博則

◎共同研究室案内

「日本文学共同研究室」

・場所 裁松館六階六六一号室

・開室日 月曜日～金曜日(木曜日は後期のみ)

・時間 十二時～十七時

・日本文学科の学生であれば、誰でも自由に閲覧できます。各種の辞書や索引、古典文学叢書、近現代の全集、雑誌など、基本的な資料を置いてあります。

・貸し出しはしてありません。

「書道共同研究室」

・場所 直心館二階二〇四号室

・開室日 月・水・木・金曜日

・時間 十二時～十八時

・日本文学科の学生であれば、誰でも自由に閲覧できます。書道に関する各種の辞書や作品図録・各種技法書など、基本的な資料を置いてあります。

・貸し出しはしてありません。

